

2022年4月3日（日）

宣 教 「何をしてほしいのか」

聖 書：マルコによる福音書10章32節～45節

みなさん、おはようございます。

今日の聖書の個所には、イエスが弟子たちにエルサレムでの受難予告を3回目にされたことが記されています。聖書では3という数字は極みに至るという意味があります。そこから新しいことが起こって行くのです。イエスの受難と十字架の死、そして復活です。それが神の都と言われたエルサレムの街で起るのです。

さて受難予告に対して、弟子のヤコブとヨハネはイエスに頼みごとをしています。このことはマタイによる福音書にもルカによる福音書にも出て来ています。マタイでは母親まで出て来ています。

◆イエス、三度自分の死と復活を予告する

32:一行がエルサレムへ上って行く途中、イエスは先頭に立って進んで行かれた。それを見て、弟子たちは驚き、従う者たちは恐れた。イエスは再び十二人を呼び寄せて、自分の身に起ころうとしていることを話し始められた。

「イエスは先頭に立って進んで行かれた。」ことは緊迫した感じがします。いよいよイエスはエルサレムの街へと目と心に向けただならぬ決意をして向かわれたのです。弟子たちや他の従っていた人たちはイエスの姿に驚いたようです。イエスは12弟子に話されます。

33:「今、わたしたちはエルサレムへ上って行く。人の子は祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して異邦人に引き渡す。

34:異邦人は人の子を侮辱し、唾をかけ、鞭打ったうえで殺す。そして、人の子は三日の後に復活する。」イエスの三度目の死と復活が予告されます。

イエスの受難をテーマにした音楽家のバッハの「マタイ受難曲」という名曲もあります。

イエスの言葉に対して、

35:ゼベダイの子ヤコブとヨハネが進み出て、イエスに言った。「先生、お願いすることをかなえていただきたいのですが。」と願い事を言います。この二人は率直でストレートな性格なのかもしれませんがイエスの気持ちを理解できていないかのようです。

36節でイエスは「何をしてほしいのか」とヤコブとヨハネ二人に言われまし

た。もし、みなさんがイエスに尋ねられたらどう答えますか？
家族仲よく、生活して行けるように、病気の癒し、
信仰、希望、愛を与えてください、などなど。切実です。

この弟子の二人は、イエスの「何をしてほしいのか」との言葉に、
「栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左
に座らせてください。」と答えます。素直というべきか、あつかましいと言うべ
きか、この二人はイエスの言葉を理解できず自分の欲望、気持ちだけなのです。
他の弟子たちも似たり寄ったりです、実はわたしたちもそうかもしれません。
わたしは「罪」という言葉を思いました。罪とは、何か悪いことをしたというだ
けではなく、本来「的を外す」という意味があります。的に向かって飛ぶはず
の矢が違う方向に飛んで行く状態だと言われます。
とすると、ここで二人の弟子、ひいては他の弟子たちも、イエスのことばを、
イエスを理解できず、自分の目では見えず、理解できず、分からない、心がイ
エスと違う方向を見ているという状態なのです。これが人間の罪の状態です。

イエスは二人に答えています。

38:イエスは言われた。「あなたがたは、自分が何を願っているか、分
かっていない。このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗
礼を受けることができるか。」

「わたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼」とは、これからエルサレ
ムでイエスが受ける苦難、十字架の死のことだと受けとめます。

「自分が何を願っているか、分かっている。。

二人を始め弟子たちは、イエスがやがて神さまから栄光を受けられる時、
自分たちを良い位につけてほしいと願っていたのです。そのような願望、欲望
を持っていたことが表れたのです。

弟子たちは、イエスを当時ユダヤの国を始め世界を支配していたローマ帝国
の皇帝カイザーに変わって世を治める王として来られたメシア・救い主である
と思っていたようです。つまりイエスをまったく勘違いして考え、理解してい
たのです。

二人が「できます」と言うと、イエスは言われた。「確かに、あなたがたはわた
しが飲む杯を飲み、わたしが受ける洗礼を受けることになる。確かに後に記さ
れた使徒言行録 12 章 1 節 2 節 (p 236) によりますと、弟子のヤコブの殉教の
死が起こったことが記されています。

この出来事は、この時イエスが語られた「わたしが飲む杯を飲み」わたしが

受ける洗礼を受けることになる。」という言葉の実現のようにも思えます。

続けてイエスは二人に、

40:しかし、わたしの右や左にだれが座るかは、わたしの決めることで

はない。それは、定められた人々に許されるのだ。」と切々と諭すように語られているように思えます。ここには主イエスの謙虚さがあるように思えます。ただ神に従って生きる、服従のイエスです。

天の国についての事柄は、イエスが決める事ではなく、天と地をお創りになったいのちの主である神ご自身であるということです。「イエスの右や左にだれが座るかは、それは、定められた人々に許されるのだ。」それは、人間が介入できない神さまの自由と力による専権事項だということなのです。

人は天国のことに注文はできず、与えられた地上で命と愛を受けた者として、謙虚に黙々と丁寧に日々を生きて行くこと、行き抜くことが大切なのです。そこには悩みや苦しみと共に、喜びと感謝があり天国、神の御国への希望があるのです。

ですから地上における争いや戦争は、神の与えた喜びと感謝を奪う的外れであり、罪なのです。わたしは、起こしてはならない悪だと思うのです。

他の弟子たちは、ヤコブとヨハネが他の弟子を出し抜いてイエスに願い事をしているのを気付いたのです。人間は、他人の弱点はすぐ気づくのです。自分の弱いところは気付きにくのです。

41:ほかの十人の者はこれを聞いて、ヤコブとヨハネのことで腹を立て

始めたのです。まことに人間らしい姿です。他の弟子たちは、どう思っていたのか。たとえ言葉に出さなくても言わなくて二人と同じようなものではなかったではないか。イエスは愛なる神さまは、言葉に出さない、人間の心の声を聞いておられるのです。それが分かれるのです。わたしたちは、自分の心の声を神さまにイエスさまに隠し通すことはできないのです！ そのことを気づき、神さまの前で認めることが、救いへの一歩なのです。実はそのことを私たちに気づかせてくださるのも、今も働かれる神の愛の力である聖霊、御霊の働きなのです。代々の信徒たちは人生におけるその働き、愛なる聖霊の働きを証してくれているのです。信仰者を教え、慰め、励ましてくださる御霊の働きが現実にあるのです。

そこで、イエスは弟子たちを呼び寄せて言われました。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている、と。

この時代、一番の権力者はローマ帝国の皇帝カイザーでした。ローマ帝内に権力を振るっていたのです。しかし、カイザーもローマ帝国もやがて滅んだのです。「驕る平家は久しからず。」です。

イエスは心から愛する弟子たちに教えられます。

43:しかし、あなたがたの間では、そうではない。そうであってはならない、ということです。

あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、

44:いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。

わたしごとですが、30代のころ、四国の松山から明石の教会に赴任する時、教会の親しかった方からアドバイスを頂きました。語り方、態度についてのアドバイスでした。サラリーマンのように、下から下から相手に接して、と。

今でも耳に残っています。単なる処世術でそうするだけではなく、心からそうすることがイエスさまの教えです。

また、イエスご自身の生き方について弟子たちに率直に語られました。

45:人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の

身代金として自分の命を献げるために来たのである。」

イエスはご自身のことを、よく人の子と言っておられました。メシア（救い主）であるとはほとんど言われなかったようです。神に服従する人の子イエスの謙虚さだと思います。

「多くの人の身代金」。身代金とは、約2000年前当時、奴隷状態から買い戻されるために支払われた、また戦争などでの捕虜になった時の、釈放のための代価を意味しているようです。

人の子イエス、神の子イエスは、罪の奴隷、神と敵対する力の捕虜状態にあるわたしたち人間を人間を罪の支配から助け出すための身代金であるのご自身のことを語られたのです。罪なきイエスの受けられた十字架は、神の救いの計画の実現にどうしても必要だったのです。初代教会の人々はイエスの十字架の死を罪の贖いの死であると受けとめ、それを伝えて行きました。

イエスは、2000年前当時の人間だけではなく、今を生きる私たち一人一人、弟子たち同様、理解できず、現実には罪に支配されている状態から、わたしたちを自由に、救い出し、解放するためにこの世に来てくださったのです。十字架につき、罪を担い、贖ってくださったのです。ギリシア語の「贖う」という言葉には、「担う、背負う」という意味もあるのです。これが愛なる神さまの、わ

たしたちと人類の救いの計画なのです。これは神の恵みであり憐みそのものなのです。

わたしたちは、今や、イエスの十字架を知ることによって、まだ苦い胆汁のような罪はありますが、罪赦された光と恵みの中を生かされているのです。そう思おうと、自分の弱さや、罪を神さまの前に正直に告白できるように思えるのです。

レント受難の中にも、神の愛の光は灯っているのです。

わたしたち闇から光に移されたことを感謝してイースタを待ち望みつつ生きて行きたいと願います。

主の平安を祈ります。